

## 発達障害に特化した民間クリニックの LDへの取り組みと提言

～ 早期発見とその後の"支え"を中心に ～

司会者： 藤岡 徹(福井大学/平谷こども発達クリニック)

話題提供者： 石坂 郁代(北里大学医療衛生学部)

河野 俊寛(金沢星稜大学)

伊藤 一美(星槎大学大学院)

山口 大輔(平谷こども発達クリニック)

指定討論者： 平谷 美智夫 (平谷こども発達クリニック)

## 平谷こども発達クリニックについて

・ 発達外来と一般小児科・アレルギー科が併設  
→今年度、多機能型事業所(生活介護など)も設立

・ 発達外来では、以下を実施

➢医師→発達障害の診断・処方など

➢言語聴覚士、作業療法士、心理スタッフ

→アセスメント、個別/小集団指導、保護者相談など

・ 幅広い分野の専門家を招き、児童の問題に対応

## 発達外来の流れ

1: インテーク(質問紙など回収)

2-1: 心理発達検査

2-2: (小学生以上)読み書きスクリーニングテスト

2-3: 必要であれば種々の精査

3: 情報のまとめ

4: 診断告知

## ADHDとASDにおけるLD併存率

2012年度(全員にスクリーニング実施ようになった年度)以降

注意欠如・多動症(ADHD) 117人中

局限性学習症(読字) 42人 (35.9%)

局限性学習症(書字) 11人 (9.4%)

局限性学習症(計算) 16人 (13.7%)

自閉スペクトラム症(ASD) 96人中

局限性学習症(読字) 28人 (29.1%)

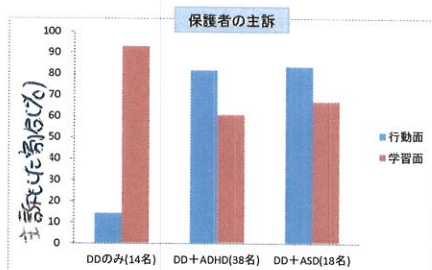
局限性学習症(書字) 10人 (10.4%)

局限性学習症(計算) 6人 (6.3%)

※疑い含む  
※IQ≧70

## これまでの研究①

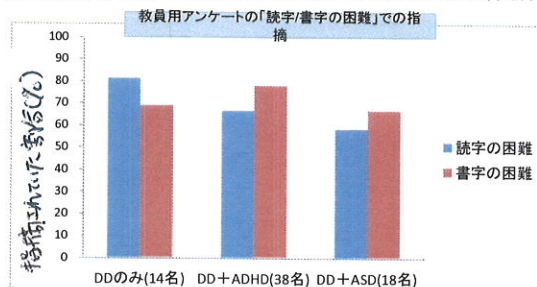
発達性ディスレクシアと診断された児童の併存症と初診時の主訴の検討(藤岡ら, 2014)



- ・ (ADHD/ASD特性などの)行動面での問題のみを主訴とするDD児が多い

## これまでの研究②

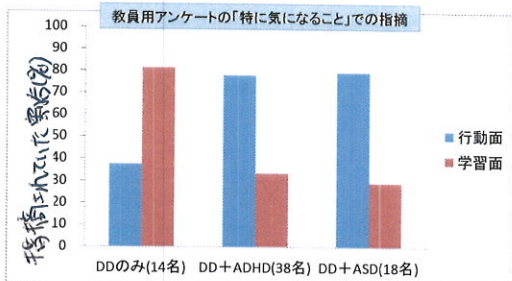
発達性ディスレクシア児の"学習面での問題"に対する担任教員の気づき(藤岡ら, 投稿中)



- ・ どちらかの困難が記述されていた児童は90%
- ・ 教員はDDの読み書きの苦しさには気づいている

## これまでの研究②

発達性ディスレクシア児の「学習面での問題」に対する担任教員の気づき(藤岡ら, 投稿中)



- 特にADHDやASDが併存する場合、学習面での問題は「特に気になること」として指摘されにくくなる

## 平谷クリニックからの提言

- ADHDやASDには、LDが多く併存する
- ADHDやASD特性のある児童では、LD特性は「主訴」や教員の「特に気になること」になりにくい  
→LD特性があるのに、**行動面での問題のみを訴えて来院するケースが多い**
- LDは「**早期発見**(見落とし防止)と**早期支援/配慮**」が重要  
→ADHDやASDのある子にはLDを疑う必要があり、**幼児期からのLD特性の把握は非常に重要**

## 今回のシンポジウムでは

- シンポジストの先生方に「早期発見/見落とし防止」「その後の支え(支援と配慮)」について、話題提供をいただく
- 特に、他の発達障害の併存した場合の幼児期の特徴について紹介していただく
- そして、平谷クリニックのスタッフより、平谷クリニックの取り組みを紹介していただく